

かつて満州と呼ばれていた黒龍江省が私の生まれ故郷である。昔、省内を流れる川に黒い龍が棲んでいるという伝説があったことから、黒龍江という名が付けられ、それが省の名前になった。

黒龍江省の冬は厳しい。「千里冰封、万里雪漂」(千里も氷に覆われ、万里も雪が舞つ)の氷点下三十度の世界を生きる人々は大自然と闘わなくてはならない。秋も終わりにになると家々は着々と冬支度に入る。まず、晴れた日を選んで二重窓を取り付ける。ガラスとガラスの間に、おがくずを十センチほどの高さに詰め、その上に人形を置いたり、ガラスに切り絵を貼ったりする。

おがくずは外側のガラスに付いた霜や雪が内側に浸透するのを防ぐ。人形や切り絵は、もの皆枯れた北国の冬に少しでも彩りを添えたいと飾るのである。冷たい風が入らないようにガラスの縁に、パテを塗り、窓のすき間にテープを貼る。家が密封されたような状態になると防寒作業は完了だ。

晩秋、人々は食料の確保に大忙しである。保存のきく白菜やジャガイモ等を大量に買い込んで庭に掘った穴蔵にしまう。保存のきかない葉野菜は塩漬けしておく。

思郷(故郷を思う)

久場 未雲

ネギは腐らないように束ねてしばらく干し、真つ赤な唐辛子やんにくなどをひもで通して最も日当たりのいい、家のドアの両側に掛けて乾燥させる。これで冬の間の食料は確保できた。

黒龍江省の母は愛情深い。厳しい冬、ちよつと油断すると手足の指先や耳たぶが霜焼けになつてしまふ。それを防ぐため、家族全員分の綿入れの上着やズボン、手袋などを作るのが母たちの一大仕事である。綿入れをまとい、帽子をかぶり、手袋をし、マスクもかける。まるで北極熊(ホッキョクウマ)のようだ。完全武装でないと黒龍江省の冬を乗り切ることほできない。半年近くも続く長い冬、春になるのが何よりも待ち遠しかった。

梅雨が明け、セミの初鳴きを聞くのと沖繩は長い夏に突入する。南国沖繩の夏にすっかり慣れてしまつた今、あの北国の冬は私にとつてまるで童話の世界のようになつてしまつた。しかし、私が生まれ育つた北の大地のすべてが、今沖繩で生きる私の原動力になっている。黒龍江省と沖繩、この二つの故郷を大切に思い誇りに思い、願わくば懸け橋になりたいと望んでいる。

(会社代表)

